

# 『猫にも愛を』

Vol. 3

執筆・編集・デザイン：菊田朱美 (テノヒラ kiku)

猫特集・第3弾となる今回は、私自身と家族に起きた出来事を書かせていただきました。祖父母の家に住みつき、増えていった猫たち。それにより変わっていった家族の関係。そして、そこから始まった私の猫活動。これは、決して特別な話ではありません。私たち家族の体験が、同じような悩みを抱えている誰かに届き、解決の糸口になればと思います。

山出に住む祖父母は、動物が大好きでした。祖父母の家には常に犬と猫がおり、遊びに行った時はそのコたちを愛でるのが私の楽しみのひとつでした。祖父が施設に入り、祖母がひとり暮らしになってから、猫が増えていきました。そのことで、祖母と母の関係は少しずつ変化していくのです。猫は不思議な生き物です。人の心の隙間をスツと埋め、心を温めるような存在です。一度その温かさを知ってしまうと簡単には離れられなくなる、不思議な生き物です。街灯もなく、隣接する

「かわいそう」  
からの  
始まり



民家もない、夜になると真っ暗で人の気配すら感じない山奥でひとりきり。祖母は寂しかったのだと思います。野良猫を見つけては「かわいそうだから」と餌を与えていましたが、それはきつと猫が寂しさを埋めてくれたから。そんな猫たちが祖父母の家を占領するまで、時間はかかりませんでした。

変わっていく

家族の関係



襖はズタズタに破れ、押し入れが猫のトイレと化して、家の主が祖母から猫に代わろうとした頃、祖母は母に「猫の処分」をお願いしました。信じたくはないのですが、祖父がいたときは生まれたばかりの目の開いていない子猫を山

に捨てに行っていたそうで、祖父がいなくなって猫を捨てることができなくなった祖母は、母にそれをお願いしたのです。祖父母の娘である母も、動物が大好きです。猫を見つけると大きな目を一段と大きく見開いて、高い声をもっと高くして猫に話しかけます。祖母はそんな母に、お願いしたのです。

## そうすることしか できなかった、 あの頃

その頃は役場でチケットを買い、依頼すると引き取ってくれる時代。母は何回かチケットを買いに行ったと教えてく

れました。実際に一度だけチケットを使ったこともある、と。その時に捕獲されたのは親子で4匹。車に乗せられ、カゴの中から自分を見つめる母猫の目が忘れられない、と、今でも涙を浮かべます。その時は選択肢がなく、「そうすることしかできなかった」のです。身を切るような思いをして猫を見送った、それなのに、気づくとまた増えている。祖母と母の間にできた溝は日ごとに深くなり、顔を合わせれば言い争う日々。どうにかしたいけど、どうにもできない苦しさを苛立ちが、一層ふたりの溝を深くしていきました。それは祖母が亡くなる直前まで続くのです。

「猫、どがい  
しょう…」



祖母の体調が不安定になり、いよいよ覚悟を決めないといけなくなった頃、母がポツリと私に言いました。「猫、どがいしょう…」。祖母が入院してからに残された猫のため、餌やりに通い続けていた母。家主がもうここには帰って来ないと気づいた時、いつまでこの生活が続くのだろう、という不安が頭をよぎったのでしょうか。山出にはその時、4匹の猫がいました。「保護

団体に連絡してみようか？」そう提案したのは私です。宇和島、宿毛、四万十、松山…どこに問合わせても断られ、途方に暮れながら次の手を考えていた時、申し訳なさそうに母が言いました。「子猫が生まれとんよ…3匹…」

え？

祖父母の家に向かうと、納屋の奥から蜘蛛の巣をつけて3匹の子猫が顔を出しました。そして、母が呼ぶと山から降りてくるほど懐



いている母猫。そんな猫たちを見て「もしかしたら自分で里親を見つけられるかも」と思ったのです。その瞬間から、私の「猫活動」が始まりました。

東京の友人に声をかけると幸運にも4匹の里親はその日のうちに見つかりました。タイミングがよかったのです。母にそのことを伝えると泣いて喜びましたが「あのころあも、こうできたらよかったけど、あの頃はともやないけどそこまで考えれなんだ」と、別の涙も浮かべて

いました。チケットと引き換えに連れて行かれた猫たちのことです。数年経っても後悔の念は、母の心から消えることはありません。

## 目の前から

いなくなったら

終わり？



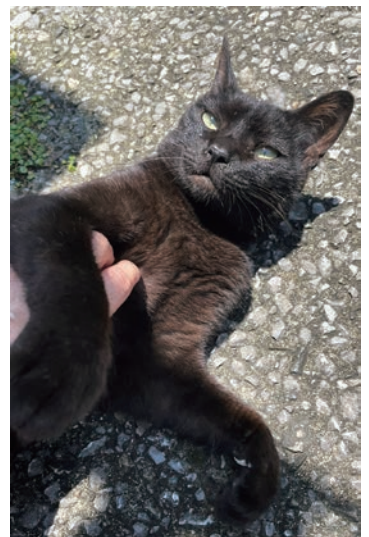
山出に残ったのは、人に慣れていない成猫3匹。捕獲も里親探しも簡単ではありません。

それを察したのか「ご飯をやらなんだら、そのうちおらんなるっていうけど…それじゃあ…いけんもんね」と、私の様子を

何うように母が言いました。「それじゃあ、いけん」。目の前からいなくなれば、面倒なこととはなくなります。お金も時間も労力もかかりません。でも、目の前から

いなくなったら終わり、ではないのです。猫たちはまたどこかで餌をもらい、新しい場所で繁殖し、もしかしたら誰かの仲を割くかもしれません。しわ寄せは必ずどこかに、誰かに、いくのです。祖父母の家で猫が繁殖したのは私たちの責任でもありません。私と母は腹をくくりました。

その矢先、雌猫のお腹が大きいに気づきます。ほどなく子猫が生まれました。何匹か生まれたはずですが、私たちが確認できたのは黒猫1匹のみ。当初捕獲予定だったブチ猫がいなくなり、



元々いた成猫2匹と子猫。私は2度目の里親探しを始めました。

「猫のこと頼んだぞー！」



「猫のこと、頼んだぞー！」これが祖母が私にハッキリと伝えた最後の言葉です。祖母の家にいた猫たちはみんな、もらい手が見つかり東京に行ったことを報告しました。その時には祖



母はもう頷くことしかできま  
せんでしたが、それでも私の言葉  
に、涙を流し、手を握り、何度も  
何度も頷いていました。これが私  
の最後の祖母孝行になりました。

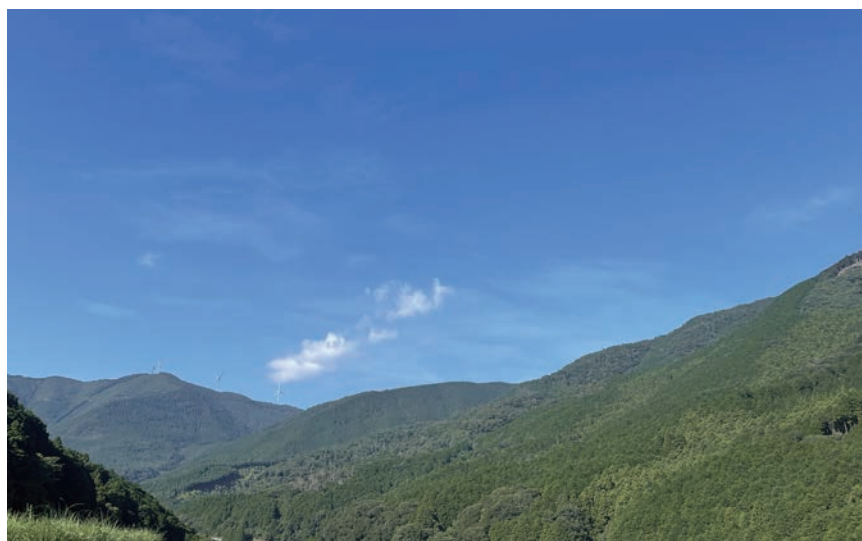
猫をすべて里親に出した後  
は、母と祖母との関係も修復さ  
れ、猫の悩みからも解放され、  
母は今までにないほど私に「あ  
りがとう」を繰り返しました。  
これまでのことがよほど辛かつ  
たのだと思います。「あんたが  
おらんんだら、今頃どうなつと  
ったんやろ…」母は今でもふとし  
た時にこう言います。あの時だけ  
で4匹の子猫が生まれています。  
放っておいたら、あつという間に  
何十匹にも増えていたでしょう。

## 「増やさない」と、 選択肢

祖母が「かわいそう」と始  
めた餌やりが、年月を経て母を  
苦しめました。その頃は、対処法  
や情報が少なく、選択肢もなく、  
どうすればいいかわからなかった  
のです。でも、現在は違  
います。避妊去勢手術や地域  
猫活動という増やさないた  
めの方法があり、それを町  
も支援してくれています。  
「これ以上増やさない方  
法」があるのです。  
猫は不思議な生き物で  
す。人の心を魅了します。  
そんな存在だからこそ、人  
を苦しめることも、人と人  
を分断させることもありま  
す。「猫には避妊去勢手術  
を」。そうすることで、私  
たち人間も穏やかに暮らし  
ていけると思っています。



最後に。猫特集の第3弾の  
寄稿にあたり、体験記として  
祖母と母のことを書いていい  
かと聞いたとき、「誰かのため  
になるなら」と快諾してくれた  
母の覚悟と勇気に心から感謝し



執筆者 <sup>あけみ</sup> 菊田 朱美 (テノヒラ kiku)

愛南町ふるさと親善大使。音楽活動을続けながら、東京と愛南町に鍼灸院を構え、2拠点生活を送る。2026年4月には、東京と愛南町をつなぎながら、地域にあるさまざまな課題に向き合い、人と人、人と地域をつなぐ活動を行うため、一般社団法人TAU（タウ）を設立。猫活動については、正しい知識を広める啓発活動や、地域で活動する方々への支援などに取り組んでいる。

「TAU（たう）」＝「届く」  
必要な人に、必要なものが“たう”ように。

TAUの活動について  
はホームページを  
ご覧ください。  
→→→  
<https://tau.or.jp>



ます。家庭内のことなので、知  
られたくないこともあったはず  
です。ただ、この問題は特別で  
はなく、いつでも、どこでも、誰  
の身にも起こり得るものです。こ  
の体験が、同じ悩みを抱える方  
の解決の糸口になれば嬉しいです。